

詩 追憶のカイロ (5)

とよださなえ

以下の詩は、とよださなえさんが、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のこととなりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。

当時も今も、近隣で紛争や内乱が止むときはなく、とよださんは、ジャーナリストとして多忙を極める夫君の仕事を支援しながら、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて、5歳と3歳の幼い子供たちを育てていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいものを感じることができるかもしれません。

今月の掲載詩は、「カイロの雨」です。「あんな乾燥した砂漠の国でも雨が降るの？」と、雨の多い日本に住む人は誰でも不思議に思います。砂漠の国の雨はしとしとは降りません。一瞬、生暖かい風が吹いたかと思うと、空からバケツをひっくり返したような豪雨になってしまいます。そして、一瞬の後に、青空が戻ってきます。そこに残されたものは……。

中東地域では、降雨の多い国もあるけれど、人々には傘を持つという習慣がありません。雨は時には洪水をもたらすほどの豪雨になるときもあるのに、一旦止んだら、目もくらむ太陽が照り付けるからなのでしょう。

（今月の詩も次ページから縦書きでお届けします。
読みにくい点をご容赦ください。）